

2019年度～2022年度における学習成果の可視化のまとめ

<はじめに>

本取り組みは、2019 年度に初めての測定を行ったものであり、2022 年度で4年目を迎え、1 サイクルが終了する。学修成果の測定については、「学習成果の測定方法は開発されているが、測定は始まったばかりであり、改善・向上にむけた取り組みは、今後の課題」(2019 自己点検評価報告書)となっていることから、このタイミングで各学部学科が測定方法の見直しや改善に向けて取り組めるようにする必要がある。

<大学としての整理>

- ・測定結果について学生にフィードバックする仕組みの構築
- ・全学的な学習成果の分析(学修行動/学修成果アンケート)
- ・報告書の書式や取り組みのスケジュールについての見直し
- ・本取り組みの意義について教員への再周知

<全学科>

- ・これまで実施してきた測定項目や内容の見直し。
- ・これまでの結果を踏まえて、どのようにカリキュラムへの反映、改善に活かすのか。

<経法商学科>

- ・「発表する」ことについては、毎年度高い平均となっており、学科の強みと思います。さらに発展させるためには、教員間の評価基準のすり合わせが4年間の課題として挙がっていることから、カリキュラムの内容や基準との関連を共有するなど、今後の取り組みに期待します(2年次基礎学力)。
- ・卒論に関して、人数の多い学科において評価基準を学科内で共有できていること大きな成果と思います。一方で、課題としてレベルや評価との関係性について挙げていますので、今後の見直しを進めてほしいと思います。
- ・2年次 D.P調査については、「多様性と他者との協働」が4年間を通して高い平均となっています。一方で、「地域共創力」や「専門的知識・技能の活用力」については、他の項目に比べると低い傾向にあります。また、4年次D.P調査についても同様の傾向がみられますが、2年次に実施した調査結果と比較すると、どの項目も平均得点が高くなっています(過去4年のデータも同様の傾向がある)。これは、学年の進行とともに効果的な学びができていることの結果と考えられます。今後は、項目ごとの得点の変化を確認し、成果や課題を共有することでカリキュラム改善に生かしてほしいと思います。

<国際コミュニケーション学科>

- ・語学の学びを中心とした学科として、英語と日本語の基礎学力試験を用いた測定を行っており、英語、日本語共に点数やレベルの向上が図られています。一方で、実際に語学を活かす機会が少ないことが2019年に課題として挙げられています。コロナの影響もあり、同様の課題が続いていることも推測できるため、今後の取り組みに反映を検討して下さい。

- ・2019年度、2020年度に得点の低かった「外国語習得」が2022年度の調査では高い値になっている。また、「多様性の理解と他者との協働」や「他者との共存態度」は高い得点となっており、「国際コミュニケーション」という学科の特性が出た結果になっていると思います。一方で、「社会・文化・歴史への理解」や「主体的な学習態度と共感能力」は低い得点が続いているため、その要因の分析や取り組みに期待します。（特に、コース再編や「那覇市真和志南地区活き活き人材支援施設」との連携の成果）
- ・4年次D.P調査については、2年次に実施した調査結果と比較すると、どの項目も平均得点が高くなっています（過去のデータも同様の傾向がある）。特に、「コース専門能力」はこれまでの調査同様に得点が伸びていることから、学年の進行とともに効果的な学びができてきていることの結果と考えられます。今後は、これまでの成果や課題、新たな取り組みの検証などを通してカリキュラム改善にも生かしてほしいと思います。

<福祉文化学科社会福祉専攻>

- ・2年次基礎学力については、4年間の調査において「コミュニケーション」項目の平均が高く、「発表」の項目が低いという傾向が続いています。これをどのように評価し、成果と課題にするのかを専攻や学科内で共有しカリキュラム改善に活かしてください。
- ・卒論については、「先行研究」や「テーマ」についての得点が高く、「内容」や「形式」、「発表」が低い傾向にある。課題として、ライティングスキルを挙げていますので、その改善に取り組むことを期待します。また、副査制度についてもスタートしたばかりとのことなので、ライティングスキルの向上への関わりも含めて検討できると良いかと思います。
- ・D.P 調査については、調査項目を整理したり改善をしながら取り組んでいると思います。この数年はコロナの影響もあり「地域に根差した福祉活動」に対する学生の参加が難しい面もあり、学生の自己評価も厳しくなっていたと思います。次年度からの地域における福祉活動の充実に期待します。

<福祉文化学科健康スポーツ福祉専攻>

- ・2年次基礎学力調査は、2021年度から「プチ研究・卒業論文ルーブリック」を活用した測定を行っており、内容の整理や改善をしながら取り組んでいると思います。ルーブリックでの測定や学生の感想等から「プチ研究」の取り組みが一定の成果が出ていると思いますが、実際の内容の高まりがどの程度あるのか、卒業論文までどのように繋げていくのかを引き続き検討して下さい。
- ・卒論については、2021年度の試験的な取り組みから2022年度より「プチ研究・卒業論文ルーブリック」が活用されている。2023年度は2年次に「プチ研究・卒業論文ルーブリック」を活用した学年が4年次になるため、その比較やルーブリックの検証に取り組んでほしいと思います。また、卒論の執筆者が伸び悩んでいるため、2年次のプチ研究から3年次以降の専門教育、卒業論文のつながりについてどのような取り組みが必要なのか
- ・D.P 調査については「福祉」の学びについての項目が継続して低い傾向にあります。課題として、どのように授業やゼミでの取り組みが「福祉」の学びに結びつくのか検証することを挙げていますので、今後の改善や取り組みに期待します。

<こども文化学科>

- ・2年次基礎学力調査については、過去4年間に於いて国語と英語の正答率が高く、算数の正答率が低くなっています。算数は小学生の嫌いな教科の上位に挙げられるため、小学校教員の養成を主目的とする学科として苦手を減らす対策が求められると思います。また、英語についても60%未満の正答率者が半数以上いるので課題になると思います。リメディアル教育の検討をするとのことなので、小学校教員の養成の主目的学科として、算数に限らずPISAやTIMSSなどに関連するような学力の育成、それを踏まえたカリキュラムの改善も必要になるかと思います。
- ・卒業論文や卒業研究については、全員が卒論を執筆することを目指して指導をしている。また、その過程で全員が執筆に至らなくても、レポートやプレゼンという形で学生が自身の学修成果を公表する機会があり、全学的にも参考になる取り組みを実施していると思います。卒論が必修ではない中で、現時点でも十分と思いますが、過去3年でみると、執筆者数が減ってきているので、その要因を学科内で共有できると今後の対策につながると思います。
- ・D.P 調査については比較的高い数値となっており、学科の教育成果が表れていると思います。今後は、経年での分析や教員採用試験の合格者や卒業後の合格者など、多角的な分析を行い、学修成果の検証を行うことでカリキュラムのアセスメントにもつなげてほしいと思います。

<管理栄養学科>

- ・2年次基礎学力調査については、「2年次前期までに履修した学習範囲に対応した管理栄養士国家試験過去問題の中から基本的な問題を抽出して作成した基礎学力測定試験」を外部の業者と連携して実施しており、客観性に担保された指標での測定を行っていると思います。その成果は年度によって異なっていますが、F 評価や 20 点代(100 点満点)が増えているので、その要因の分析や改善に向けての継続した取り組みが必要になると思います。また、「基礎学力測定試験」の結果を今後の学習の動機づけとして活用するためのフィードバックを実施しているので他学科の参考になる取り組みとして継続してほしいと思います。
- ・4年次 D.P 調査や卒論については、今年度が初めての実施になると思います。完成年度を迎えたこの段階でこれまでの学修成果や設置科目、卒業生の状況など多角的にカリキュラムの検証を行うことを期待します。

<大学院>

- ・大学院は人数が少なく、大学院全体としての評価というよりも学生個人へのアプローチが重要になると思います。D.P 評価や修士論文の作成までの変化を引き続き実施するとともに、カリキュラムへの反映も検討してほしいと思います。

<その他>

- ・自己評価という調査の限界を共有する。
- ・即時的なカリキュラムへの反映ではなく、学科で結果を共有し、カリキュラムを検討する際の材料とする。
- ・D.P と各授業の関連についての学生の理解をどのように図るのか。